

MINAMISOMA

南相馬市サポーター 会報誌
magazine for
minamisoma supporter

ミナミソウマガジン
2023 winter

図書館 溶け込む暮らしに



10周年を記念して特集した『ミナミソウマガジン v01・3』「南相馬市立中央図書館を訪ねて」から3年。オープンマインドを体現する図書館は、コロナ禍においても、さまざまな人の居場所として開かれています。

中央図書館開館前から司書として働く高橋将人さんは、現在は主に移動図書館の担当。図書館の中から見えること、まちに出かけていくこと、そして子どもの頃から今まで続く、図書館と共にある暮らしについて聞きました。

※今号はぜひ、「ミナミソウマガジンv01・3」と共にお楽しみください。



- 2 暮らしに溶け込む図書館
9 旅行者、移住者にもやさしい図書館案内
としょかんのTOMOみんなみそうま
10 なんだか気になるみなみそうま
あかりのファンタジーイルミネーション in おだか

- 11 侍の日常
わたしの推しみやげ

暮らしに 溶け込む 図書館

Minamisoma Life with Library





「働くってなんだろ。どんなことを「仕事」にすればいいんだろう。幼い頃に抱いた漠然とした「将来の夢」が、次第に手触りを持つた「就職」に変化する中学生の頃、高橋将人さんが見据えた先は、司書だった。小さい頃から本関東にある図書館司書を養成する大学へとまっすぐに進んでいった。しかし、司書の職は言わずと知れた狭き門。閉ざされたときのことも視野に入れた学生生活だったという。

「ここに就職した理由は、ざっくばらんに言つてしまえば、拾つてもらえたから（笑）。そもそも正規の資格職として司書を雇う図書館は全国的に貴重なんです。ちょうど新しい図書館を建てるときでタイミングも良かった」と高橋さん。南相馬市立中央図書館（以下、中央図書館）では、館長を除くフルタイムの職員18人全員が司書資格を持つプロフェッショナルだ。さまざま得意分野や個性を持つた司書が集まるこによって、図書館はいきいきと有機的になっていく。

2008年、中央図書館で働くために南相馬市に移住してきた高橋さんは、スタッフの中でも中堅どころ。司書という肩書きを持ちながら、図書館内の

多くの役割を担ってきた。司書の仕事の幅は想像以上に広い。ここ7年は中央図書館がアウトリーチの一環で力を入れている移動図書館の担当をしている。「社会人になった時から、20年、30年と同じ仕事を積み重ねることが夢だった」と言う高橋さん。ひとまず10年、あつという間に過ぎていった日々を、「本の側で働いている自分のことは、好きでい続けられている」と振り返る。

信頼し合うことで生まれる オープンマインドな図書館

中央図書館自体には、10年あまりでどんな変化があつたのだろう。



「今も昔も、ルールが少ないのは特徴かもしれません。図書館を一周してみてくれればわかりますが、あれはダメ、これもダメっていう張り紙がないでしょ。とはいって、市民の熱望で、すごく高い志でできた場ですから、最初は目指す姿が明確になりました。そのためのルールもありましたが、どんどん削ぎ落とされていったんです」

例えば、はじめのうちは飲食は厳禁だったが、水筒やペットボトルなどでの水分補給は解禁。現在、電源は解放され、図書館だからと私語を禁止にするのではなく、テラスではおしゃべりを楽しめる。そんなあり方は、張り紙が示したものではなく、利用者の譲

り合いやコミュニケーションからかた

ちづくられていったもの。だからこそ、ここには本を読む人、勉強する人、くつろぐ人、さまざまな人が混ざり合っている。

隠れ家のような居心地の良さのある館内には、裏を返せば死角が多い。「観察に来た人には、驚かれますよ。『丈夫なの』って。確かに管理しやすさを考えたら、効率は悪い。要は、盗難を心配されるわけです。でも、そんなことを気にし始めたらパンクするし、他の図書館に比べてよく本がなくなるわけでもないんです。利用者を信頼するしかない建物のつくりだからこそ、一方的ではない関係性のなかから、図書館運営が促されているのだぞ感じます」

「公の場が、皆さん之力で寛容な方向へ向かっているのは望ましいこと」と高橋さんは言う。「だけど、ゆるいだけじゃ成り立たない。『みなさんで使う本ですから』と、借りた本を必ず風呂敷に包んでから手提げに入れる方がいい。もちろん、みなさん、普通に扱ってくれたらいいんですよ。でも、公共物に対する考え方が素敵で、そういう方にも支えられているんだと背筋が伸びるんです」

ほどよい距離感で頼れる存在に

過度に介入しない心地よさの一方で、積極的に対話していく姿勢もまた持ち

合わせている。その一例が、ティーンズコーナーの投書に司書が応戦を絞つて回答するもの。このやりとりを眺めている隠れファンも結構いるそうだ。

「かつて司書になりたいって書いた子がいたんですよ。そして今、彼女はここで働いている。本人はこの話をされすぎて、鬱陶しがっていますけどね(笑)」

言われすぎるほど、図書館に関わる人たちにとつて嬉しいできごとだったのだろう。眞面目な想いには真摯に、じやれ合いたい言葉にはユーモアを。かつて高橋さんも解答の担当をしていて、「大喜利のように試されていて、楽しめたな」と懐かしそう。後ろ髪をひかれつつも、今はこの役目は若手に引き継いだ。高橋さんが現在担当している移動図書館では、幼児から高齢者まで幅広い世代と、本を通して対話するやりがいを感じている。

南相馬市の移動図書館バスは東日本大震災後に寄贈されたもの。バスが巡る場所は次第に増え、現在では33カ所へ、およそ2週間に1度の頻度で訪れるようになった。市内の保育園や老人福祉施設、公民館など、行き先で待っている人たちの年齢も属性もばらばら。行き先によつてパズルのように入れ替える本の多さに驚かされる。高橋さんは、約3000冊の本が積み込まれたバスに乗り、週4日、1日に3、4ヶ所、市内を飛び回る日々。「図書館にいる以上に利用者さんとの距離が近くて、私は好き

な仕事。毎日本当に楽しいです」これからも、図書館があり

中央図書館は市内の小中学校とも連携していく、ハブになっているのは、中央図書館で経験を積んだ学校司書。限られた時間ではありますが、ここで教員が授業を受け持つこともあります」

中央図書館という知の森は、この10年余りの間に、鹿島図書館・小高図書館のほかにも、さまざまな場所に枝葉を伸ばして、しっかりと根を張っているのだ。

この森を手入れし、利用者の道案内をするのが、高橋さんをはじめとした司書のみなさん。彼らは、地域やこの地で暮らす人たちに寄り添い、選書していく。まち全体を俯瞰するような仕事をの一方で、利用者一人ひとりと、一冊の本をつなぐ親密さにも自覚的でなければならぬ難しさもある。

「何でもお見通しというわけではないですが、利用者さんと付き合いが長くなれば、どんな本をおすすめすればいいかも見えてきます。だけど、本は自分で掘り当てたい人もいて、先回りするのがいいとも限らない。予見も良し

うからには、司書としてこのまちで働く選択肢を広げていきたいですね」

毎日、知識とカンを総動員して働く高橋さんも、休みの日になれば今でも1人の「本好き」に変わりはない。家族で来館すれば、子ども用の本棚に飽きたらず、未知の本の森にぐんぐん迷い込んでいく2歳の娘の後ろ姿を追いかけている。



侍の日常肆



相馬野馬追には多くの侍が出陣し、勇壮な姿を見せます。しかし、1年に3日間のハレの日以外は、侍たちは鎧を脱ぎ、各々の仕事や学業に打ち込み、暮らしているのです。

鈴木 清重 殿 (72) 役付：執行委員長付



観光協会の事務所「銘醸館」にて

my favorite MIYAGE
at Minamisoma

わたしの 椎しぐれや さ



その2 小高工房 小高一味・大辛赤色

手摘みの鷹の爪を丁寧な仕事で皮、種、胎座(ワタの部分)に分けて辛さの異なる三種類の一昧を作っています。特にオススメは皮のみを使用した小高一味大辛赤色です。辛みが控えめで風味がとても良く、どんな料理にも合う逸品です。辛味が得意な方は小高一味激辛緑色に挑戦してみてはいかがでしょうか。私の親友の母、廣畠裕子さんが手掛ける「小高とうがらしプロジェクト」、小高を元気にする活動に感服いたします。

ちょっととした差し入れに、とっておきの贈り物に、メイドイン南相馬の一品はいかがでしょう？ 南相馬市で暮らす人々に、おすすめのおみやげと理由を教えてもらいました。



ホテルラフファイア
日本料理 花月
料理長
渡部光壯さん



Shop Information

所在地 〒979-2124 南相馬市小高区本町1-53
電話番号 0244-26-4867
オンラインショップ <https://odakachilli.thebase.in/>



音楽に合わせて光が変化する、小高交流センター。



多くの人が訪れる、小高浮舟ふれあい広場のイルミネーション。

これまでの開催概要	
2022	30件参加。
2021	210件参加。人手も300人を上回る。
2017	「あかりのファンタジーイルミネーションinおだか」に事業名変更。
2012	東日本大震災により中止。
2011	第9回は、点灯式および500人を集客。
2010	第1回、「あかりのファンタジーイルミネーションinおだか」を開催。
2002	復興の道しるべ「仮設住宅イルミネーションinおだか」に事業者・店舗・家庭から23件が参加。

黒木さん宅



家は山の中にあり、県道を通る車から見てホッとした気持ちにならなければ、避難を終えて帰って来てから電飾を飾るようになりました。2016年からは公式マップにも掲載されています。毎年予算を決めて、取り替えたり買足したり。装飾を選ぶのは妻、飾るのは夫の役目で2日くらいかけて「ひらめき」で木の間からビカビカと漏れるやわらかい光がお気に入りです。

大森さん宅



小高のイルミネーションには第1回から参加。当初からひとつの灯りを何倍にも増やす方法を考え手作りしていく、大変ですがやりがいがあります。毎年、ホームセンターなどで見かけて「飾りたい」と思ったものを選び、全体の構想を考えます。LEDに変わって電気代は1/7くらいになり、電飾は扱いやすくなりました。今は孫や近所の子たちに喜ばれるのが嬉しいです。

なんだが気になる みなみざしま

小高に灯る「あかりのファンタジー イルミネーション in おだか」

2023 Winter
Minamisoma Topics

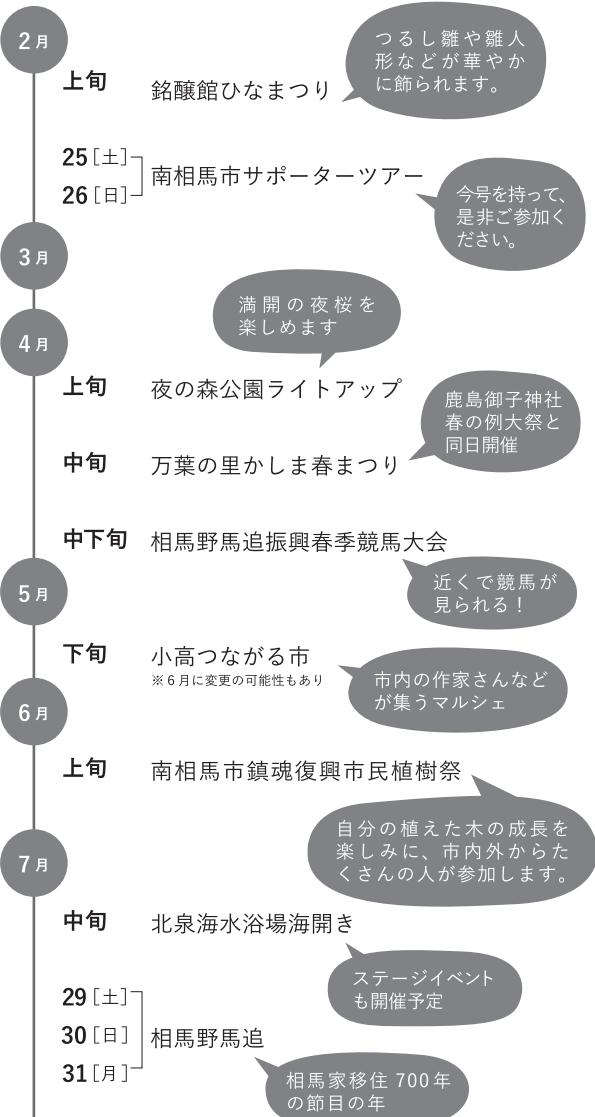
旬のニュース、意外と知らないとつておきの話などなど「なんだか気になる」南相馬市の話題をピックアップ！

「イルミネーションの開催時期には、夜のドライブに特別に連れて行ってもらえる。子ども時代のワクワク感は今でも覚えています」と小高生まれ育った小高観光協会の小泉怜奈さんは言います。今では自分が親になり、子どもが通うこども園のイルミネーションと一緒に見ることができ、嬉しいとのこと。公式マップに掲載される場所に限らず、多くの場所で、さまざまに明かりを灯してもらうのが、主催者の願いです。

「段取りは大変ですが、そのぶん多くの人に見てもらいたい。正月や成人式に帰省する若者に合わせて、1月の連休までやっているんですねよ」(小高観光協会・高田文佑貴さん)。移動手段を持たない人のために、小型バスで約1時間かけて周遊するツアーの企画も行いました。まちの中心部では、11万球のLEDを使つたきらびやかな明かりの鑑賞が可能。その他、各家庭や事業所を巡れば、十人十色の明かりを堪能できます。



南相馬市のイベント

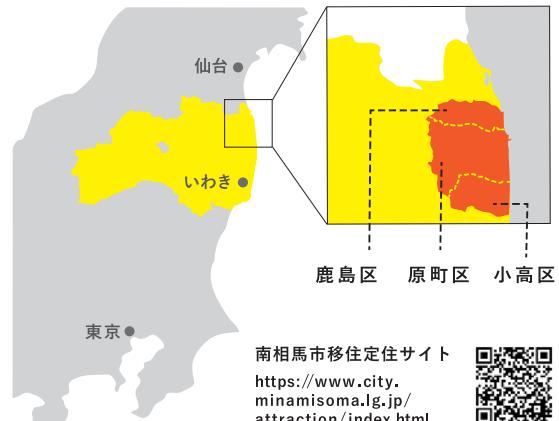


※感染症拡大の状況等により、イベントが中止・変更になる場合もございますので、ご留意ください。

南相馬市とは？

南相馬市は福島県浜通り北部に位置し、温暖で降雪も少ない暮らしやすい地域です。東京からの距離は292km。いわき市と宮城県仙台市のはば中間にあります。

一千余年の歴史をもつ国指定重要無形民俗文化財「相馬野馬追」が根づいている一方、未来への期待ふくらむロボット産業の集積や、若手起業家による地域に根ざしたなりわいづくりなど、新しいことが始まっているおもしろい地域です。



南相馬市ふるさと応援寄付金サイトはこちら



ミナミソウマガジンとは？

南相馬市の「いま」を伝えるため 2019年1月に創刊した1号1テーマの特集と連載からなる会報誌です。読者は南相馬市のサポーター会員。サポーターには、市外に住んでいて南相馬市と関わりを深めたい方や移住を検討されている方なら誰でも無料で登録できます。南相馬市の情報や暮らしをお伝えします。

「ミナミソウマガジン」が届く！

『南相馬市サポーター』
登録はこちらから



ミナミソウマガジン 編集後記

みんな大好き図書館特集。私のお気に入りの場所は「こどもとよかん」の読書席です。幼少期に読んだ懐かしい本に目を通してながら、気になった本たちを腕いっぱいに抱えて満面の笑みで戻ってくる子どもたちを見ると、ほっこりした気持ちになります。「こんなに読み切れないから、また次ね。」というと少し不満げな顔…まだまだ足繁く通う日々が続きそうです。

2023 winter

発行元：南相馬市役所

統括編集長：武田智芳（南相馬市役所）

アートディレクション・デザイン：西山里佳（marutt Inc.）

編集・執筆：小野民、執筆：蔵田志保

写真：鈴木宇宙、齋藤亮太（marutt Inc.）

制作：

（南相馬市役所）浜口周也、大和田智之、林 純太郎、吉田亜衣、佐藤遼平

（一般社団法人 南相馬観光協会）比護隆之、星 順子

発行日：2023年1月13日

問い合わせ：南相馬市サポーター事務局（南相馬市役所内）

〒975-8686 福島県南相馬市原町区本町二丁目27番地 / TEL : 0244-22-2111

<https://www.city.minamisoma.lg.jp/>